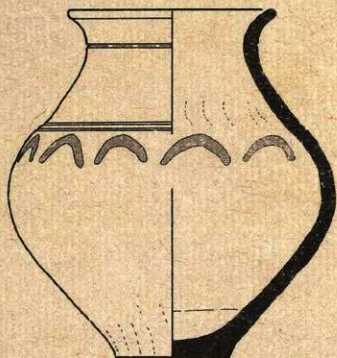


大阪文化財センター調査報告集Ⅱ

文化財調査報告集'74



財団法人 大阪文化財センター

~~大阪文化財センター~~
蔵書
第2360号

は し が き

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

大阪文化財センターの昭和49年度の調査事業は、大規模な宅地開発等の計画だおれもあって、その数は5件を数えるにすぎませんでした。

当センターの業務課調査室の仕事は、大阪府下に存在する各種の埋蔵文化財の基礎的なデータを集め、それを基礎に、より発展的にこれらの文化財を継承せんとするものであります。しかしながら、この様な意気は、文化庁をはじめとする行政面での積極的な姿勢が必要であると同時に広く府民全般の理解も必要なのであります。

ここに『文化財調査報告集'74』と題して出版した本冊子は、上述の5件の調査結果を合冊したものであります。

この意気に理解をいただき、より広範な人々が、この冊子を利用され、埋蔵文化財のあり方により一層深い御理解をいただけるならば、関係者一同、望外のよろこびとするところであります。

昭和50年5月

文化財調査報告集 '74

目 次

1. 大阪府池田市伏尾地区埋蔵文化財分布調査報告書
2. 中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告書
3. 泉南郡熊取町埋蔵文化財分布調査報告書
4. 近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他 5 遺跡第 1 次発掘調査中間報告書
5. 近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第 1 次発掘調査報告書（現地調査総括編）
6. 近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他 5 遺跡第 1 次発掘調査報告書
7. 都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘調査報告書



大阪文化財センター調査報告Ⅵ

大阪府池田市伏尾地区埋蔵文化財分布調査報告書

— 阪急不動産株式会社開発予定地内 —

昭和 49 年 5 月

財団法人 大阪文化財センター

はしがき

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤三之雄

公害問題に続いて、石油危機、物価問題は現代日本の産業構造のあり方に大きな反省を促しつつあります。国土開発においても自然環境、歴史的風土、埋蔵文化財の破壊をもたらしましたが、近年徐々に緑地保存や史跡公園が立案、実施されています。しかしながらこの様な努力がはらわれつつも、私たちの生活が道路建設や宅地造成を要請する限り、今後も郷土は大きく変貌を続けていくでしょう。このような時代にあって土に刻まれた郷土の変遷、ことに大阪は古代統一国家生成の中心舞台であり、日本各地に出現した数多くの国家が統合される激動の時代の様相を示す歴史遺産が日本列島の大改造の中で甦ることを願ってやみません。

今回実施した池田市伏尾地区の遺跡分布調査は阪急不動産株式会社の委託を受け、開発予定地域内の埋蔵文化財の実態の把握を目的としたものです。調査の実施にあたり多大な援助を下された阪急不動産株式会社及び出口組の関係各位に厚くお礼申し上げます。

例 言

- 1) 本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、阪急不動産株式会社の委託を受けて、昭和49年4月15日から、同年4月27日迄の間に調査を実施した、大阪府池田市伏尾所在、阪急不動産株式会社開発計画地内、埋蔵文化財分布調査報告書である。
- 2) 本調査にかかる必要経費は、全て阪急不動産株式会社の負担になるものである。
- 3) 調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が実施し、室長中西靖人の指示の下、調査主任辻内義浩、妹尾直子が担当し、調査員として赤木克視氏、国乗和雄氏、安井幸雄氏の協力を得た。さらに大谷大学学生木村宏史、立命館大学学生山崎博の諸君の協力を得た。記して感謝の意を表する。
- 4) 本報告の執筆は、中西靖人(I)と妹尾直子(II、III)があたり全体の監修は中西靖人が行った。
- 5) 調査に際し、阪急不動産株式会社、出口組の方々に多大の援助を受け、また宿泊に関しては満寿美荘の協力を得た。記して謝意を表す。

〔Ⅰ〕調査に至る経過

阪急不動産株式会社が開発計画を進めている大阪府池田市伏尾台の丘陵地帯は、東に久安寺、南に木部古墳群をひかえ、古くから開けたところとして有名である。

この丘陵を住宅地として開発しようと計画した阪急不動産株式会社は、この地域は市街化調整区域であることと、いまだかつて文化財等の調査がなされていないことから、大阪府教育委員会とその取扱いについて協議をかさね、文化財の分布調査を実施する必要があるとの指示に従い、昭和49年4月1日付で財団法人大阪文化財センターに当該地域の文化財分布調査の依頼を提出し、経費等を協議し、昭和49年4月4日付をもって受委託の契約を締結し、大阪文化財センターは同年4月15日から現地に於ける調査を実施したのである。

〔Ⅱ〕池田地方の歴史的環境

池田地方は「五月山卯の花月夜子規きけどもあかずまたなかんかも」と歌われた山々と、清流猪名川及び猪名川によって形成された沖積平野から成っており、数々の遺跡と多くの伝承をはぐくんできた。

縄文時代の遺跡はそれ程多くはないが、待兼山の北側に瀬川遺跡があり、池田市宮の前、伊居太神社参道、川西市能勢口、豊中市上野、伊丹市小坂田などから石器、土器が出土している。

弥生時代というとなず宮の前遺跡が浮かぶ。この遺跡は、現在は住吉三丁目にあたる。待兼山丘陵より西にのびた標高30mの台状の地形で、前池、新池を境にして西と南は約10mも急に低くなっている。この低地は、猪名川、箕面川が合流するところで、当時の稲作には好条件のところであったと思われる。台

地は大阪国際空港が眼下にみえ、小形四区袈裟襷文の銅鐸の出土した中村まで1.5km、豊中市勝部遺跡まで2.7km、尼崎市田能遺跡まで3.5km、川西市加茂遺跡まで4.5kmのところにある。石器土器の散布範囲は約200m四方に及びⅡ様式からⅣ様式の住居跡と方形周溝墓が多数発見されており、特に古墳時代のしかも須恵器を出す、方形周溝墓が発見されたことは様々な問題をなげかけた。

他に豊中市庄内、上津島、伊丹市小坂田（前期）五月山公園、豊中市勝部、野畑、伊丹市小坂田、川西市加茂、尼崎市田能（中期）池田市神田、五月山愛宕神社付近、豊中市穂積、原田、庄内、上津島、新免、利倉、川西市加茂、伊丹市小坂田、尼崎市田能、下坂部、富田若王寺、椎堂、口田中、西川（後期）及び猪名川、藻川の川床からは、前中後期を通して遺跡が発見されている。また銅鐸が豊中市原田神社、箕面市如意谷、伊丹市中村、川西市栄根、多田満願寺で発見されており、興味深い処である。

さて前期の古墳は、宝塚市万籟山、池田市茶白山、娛三堂、豊中市待兼山古墳と、千里丘陵の尾根上に並んでいる。茶白山古墳は昭和33年に小林行雄博士ら一行によって発掘され、今は団地の中に公園として残っている。標高約90mのところにある全長約62m、後円部径33mの前方後円墳で、後円部の墳頂のほぼ中央に、古墳の主軸に対して直交して竪穴式石室が基かれている。石室の壁面にはベンガラが塗布されており、脚付碗型土師器、碧玉製石釧、碧玉製管玉、ガラス製小玉などが出土し、朝顔形埴輪円筒管が、前方部の平担面がまさに後円部の斜面に移行しようとするところの墳丘の主軸線上に埋められていた。また娛三堂古墳は、標高109mのところにある高さ5m直径30mの円墳である。明治20年に発掘され、石英粗面岩の割石を積み重ねた竪穴式石室でベンガラが塗布されていたらしい。遺物には、半円方格方射式神獸鏡、碧玉製石釧、管玉、勾玉、土師器の壺、斧、直刀、劍、小刀などがある。

池田市内には、鉢塚古墳、二子塚古墳、木部1・2号墳、野田塚古墳、孤塚古墳、城山古墳、宇保神社址古墳、脇塚古墳、紅葉古墳、横山古墳、五月山古墳などの後期古墳がある。鉢塚古墳は石舞台古墳と肩を並べる大きな横穴式石

室をもつ上円下方墳で、二子塚は、新羅に多くある双円墳である。秦氏、漢氏など帰化系氏族との関連からも多くの問題を提示していよう。

秦氏、漢氏の伝承は、4世紀までさかのぼる。秦氏は、秦上、秦下の両郷にその名を残し、今日畑の地名となっているし、漢氏はその帰化伝承が後世、あやはくれは伝承に成長し、池田文化の多彩な諸相の源となった。

この様に、自然環境にめぐまれた池田の地は、その後も我国歴史の中心に近いこともあって、より多くの歴史時代の遺跡、寺社、仏閣を残し、現在に至っている。

〔Ⅲ〕調査の目的と結果

今回実施した埋蔵文化財分布調査は、阪急不動産株式会社の開発予定地に於ける埋蔵文化財の有無を開発行為以前に調査し、池田市域に於ける埋蔵文化財の基礎資料を整備することを目的としたものであり、存在した場合には、それらの遺跡、遺物等の保存対策を再度協議する前提に立って行なったものである。

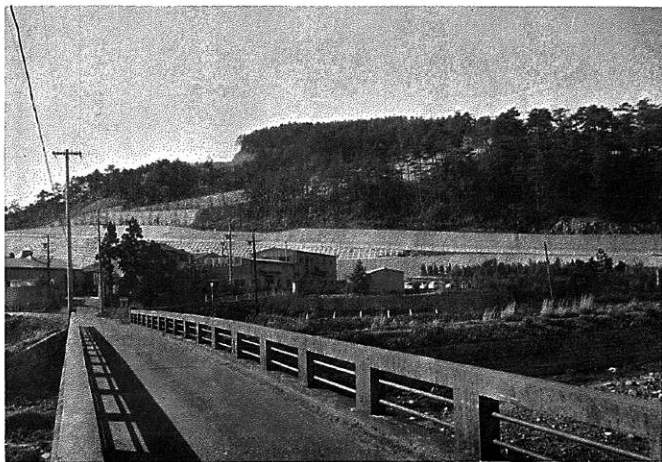
調査は昭和49年4月15日～49年4月27日までの間（日曜を除く）延12日間実施した。

調査地域は、丹掇街道伏尾の西の山で、総面積約68haであるが、旧宅地造成法に基づいて開発された第Ⅰ期伏尾台分譲地の為の仮設道路によって切断され、一部山も削られている。現状は松林であるが、尾根道以外は雑木及び大きなシダ類でおおわれている。地形的にはやせ尾根と深い谷によって構成されており、特に余野川、久安寺に降りる北東の谷は極めて深く、岩肌はもろく、調査時は大変な労を要した。

調査は尾根と谷を中心に、斜面の踏査も試みた。きれいに節理する岩が多く、

石室の石かとも思われたが、確実に組んでいると認められるものはなかった。
また仮設道路の西側の谷の斜面で6世紀から8世紀ごろのものかと思われる須
恵器片1片と、北の尾根上で時期を限定できない瓦器片1片、古伊万里の破片
を1片拾ったのみで、遺構の存在は確認し得なかった。





調査地全景(南より)



調査地全景(北より)



須恵器片採集地点



調査地中央部より東遠景

大阪文化財センター調査報告Ⅵ

中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告

—— 高速電気軌道第2号線建設工事に伴う ——

昭和49年5月

財団法人 大阪文化財センター

は し が き

大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

東住吉区の長吉附近は南に大和川を控え、東には生駒の山系を望み、大阪市内では珍しく田園風景の名残りを止める地域ですが、ここにも都市再開発の波が押し寄せ、近代的な景観に姿を変えつつあります。日本列島大改造とも称される各種建設工事が地下に眼る私達の祖先の足跡を地上に甦えらせているのはあながち偶然ではなく、過去の大阪の歴史が新たな大阪の発展に受け継がれているといえるでしょう。

しかしながら旧大和川流域の組織的な遺跡調査は端緒に着いたばかりで開発の進行との不均衡は大きく、古代難波の繁栄を築き上げた河内平野の歴史的発展の解明へ一層の努力が望まれます。特に大和川水系が大阪の古代文化をはぐくんだ力は大きく、祖先の水との斗いを正しく評価することは、現代の私達に人間と自然の豊かな関係を教え、頻死の状態にある河川を甦らす礎とすべしとなるでしょう。

このたび大阪市交通局をはじめ、株式会社銭高組、住友建設株式会社の関係者の多大な援助のもとに新たな遺跡を発見しえたことは望外の喜びです。ここに深く感謝の意を表します。

昭和49年5月

例 言

- (1) 本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、大阪市交通局の委託を受けて実施した高速電気軌道第2号線内の埋蔵文化財試掘調査報告書である。
- (2) 調査に要した費用はすべて大阪市交通局が負担した。
- (3) 調査は財団法人大阪文化財センター業務課調査室長、中西靖人、同調査員、辻内義浩が担当し、昭和48年11月6日から、昭和49年5月9日までの間に随時実施した。
- (4) 調査に当っては赤木克視、安井幸雄、木村宏、松本実、橘正美、国乗和雄の各氏の協力を受けた。
- (5) 本報告は中西靖人が監修し、辻内義浩が執筆した。製図は当センター調査員、妹尾直子の手をわずらわせた。
- (6) 大阪市交通局高速鉄道建設部、第2建設事務所の関係者各位、ならびに住友建設株式会社、株式会社銭高組の関係者に多大の援助を受けた、記して感謝の意を表す。

目 次

は し が き

例 言

I 調査に至る経過.....	1
II 調査の結果.....	1

挿 図

地層断面模式図

図 版

- 図版 1 調査位置図
- 図版 2 試掘位置及び遺跡範囲略図
- 図版 3 31工区地層断面図
- 図版 4 32工区地層断面図
- 図版 5 31工区第4トレンチ、32工区
第4トレンチ断面
- 第版 6 32工区第7第10トレンチ断面 図版 6

〔Ⅰ〕調査に至る経過

大阪市交通局が建設工事に着手した高速電気軌道第2号線延長工事は、大阪市東住吉区長吉出戸町、同区长吉長原町、同区长吉本町にかかる大阪府道中央環状線内を通過するものであり、遺跡の存在する可能性の極めて強い地点として注目されているところであった。しかしながら河内平野、特に大和川沿岸部については、後世の土砂の推積が多いことから、遺跡の埋没深度が深く、通常の分布調査等の地表面の観察によってその存在を知ることは極めて困難な状態である。したがって周知されている遺跡の有無に関係なく、土木工事が施工される場合は、試掘調査が必要であるとの方針が大阪府教育委員会にあり、今回の工事もその対象として考えることとなった。

この旨連絡を受けた大阪市交通局は、急ぎ大阪府教育委員会と協議を持ち、調査の方法、期間、工程等について打合せを行った。その際大阪府教育委員会には、当時日本道路公団大阪支社の委託を受けて近畿自動車道予定路線内部に於ける第1次発掘調査を実施することになっていた財団法人大阪文化財センターが、当該調査を実施するのが適当であるとの意見を打出し、調査については当事者間で協議されたい旨の指導があった。

これによって大阪市交通局と財団法人大阪文化財センターは昭和48年10月6日付で調査の委託契約を締結し、同年11月6日より調査に着手した。

〔Ⅱ〕調査の結果

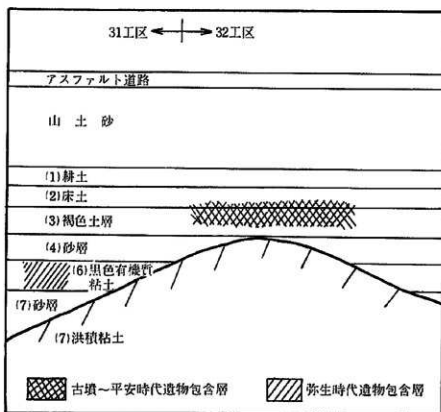
今回の調査は第31工区で9カ所、第32工区で11カ所の試掘を行う予定であったが第30工区、第31工区で各2カ所増設した。これらのテストピットは50m間隔で設定され、道路面より地下5mまでを2.5mづつの2次に分け掘削した。掘削は重機で行い、調査は断面の観察を中心にした。

調査対象地域の地層は(1)耕土、(2)床土、(3)褐色土層、(4)砂層、(5)黒色有機質粘土層、(6)砂層、(7)洪積粘土層に大別される。第7層の粘土は、N値20をこえ非常に堅く洪積層に属す旨、交通局よりボーリング調査の結果を教示された。この

洪積粘土層は第32工区No.7テストピット附近を頂部とした微高状を呈しておりこの粘土層上に順次砂や粘土が堆積したのであろう。

これらの土層の内、第3層の褐色土層中に古墳時代から平安時代の遺物、第5層中では弥生時代の遺物が認められた。後者は第31工区の路面下3.2m (o.p. 9 m) の深度に位置し、No.0～No.1の間を西限、No.2'～No.3の間を南限とする範囲に広がっていると考えられる。前者は第32工区の路面下1.8m (o.p.11m) の深度に位置し、No.2を北限、No.10を南限とする範囲に広がる。

包含層のひろがり限定するために第31工区の西端で1カ所、第30工区で2カ所、更にNo.2とNo.3の中間にテストピットを設定した。それぞれの箇所では黒色有機土層は認められたが、No.2'以外は遺物を包含しなかった。よってNo.1附近を西限、No.2'附近を南限とした。



挿図 地層断面模式図

〔第31工区〕

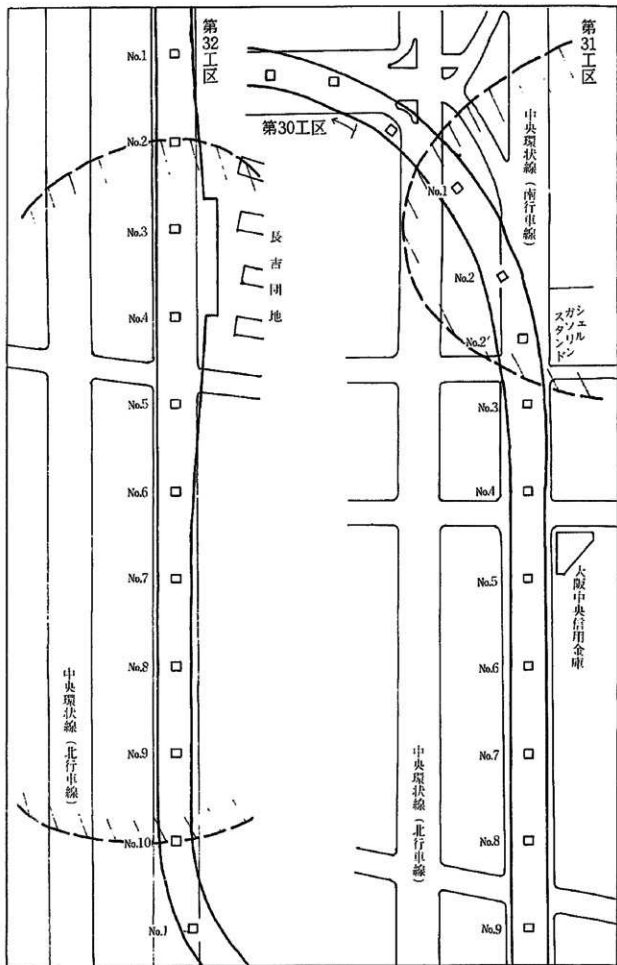
第1次掘削ではNo.1～No.9の全テストピットで遺物、遺構は検出されなかつ

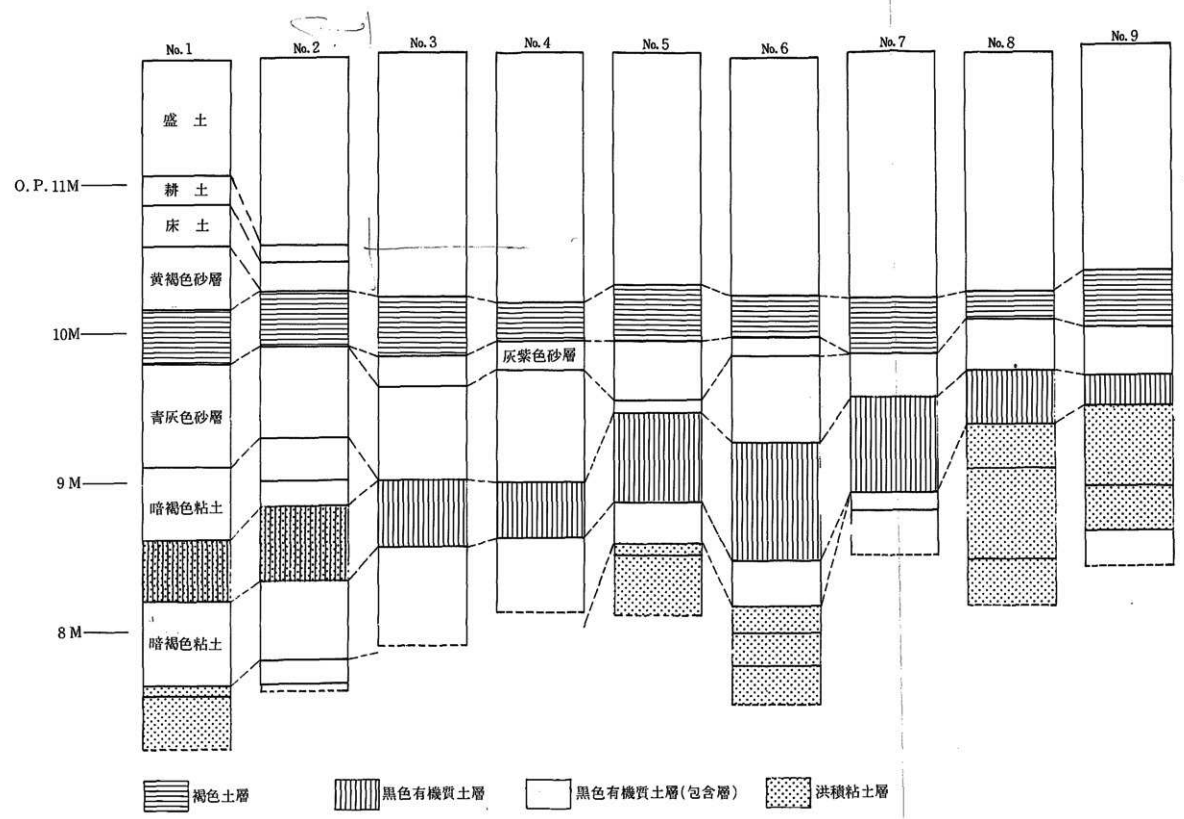
た。第2掘削の際、No.1とNo.2のテストピットで道路面下約3.2mの深度に埋まる黒色有機質土層中より弥生式土器、石器が検出された。土器は小片、少量で器形や文様の判別し得るものは少ない。弥生時代中期に属す土器（凹線文）を確認したが、前期の土器の存否は確認し得ていない。包含層の厚さは約40cmで、遺物は多くない。包含層の下層は暗褐色粘土であり居住に適さないと考えられるが遺構の存否は不明である。

〔第32工区〕

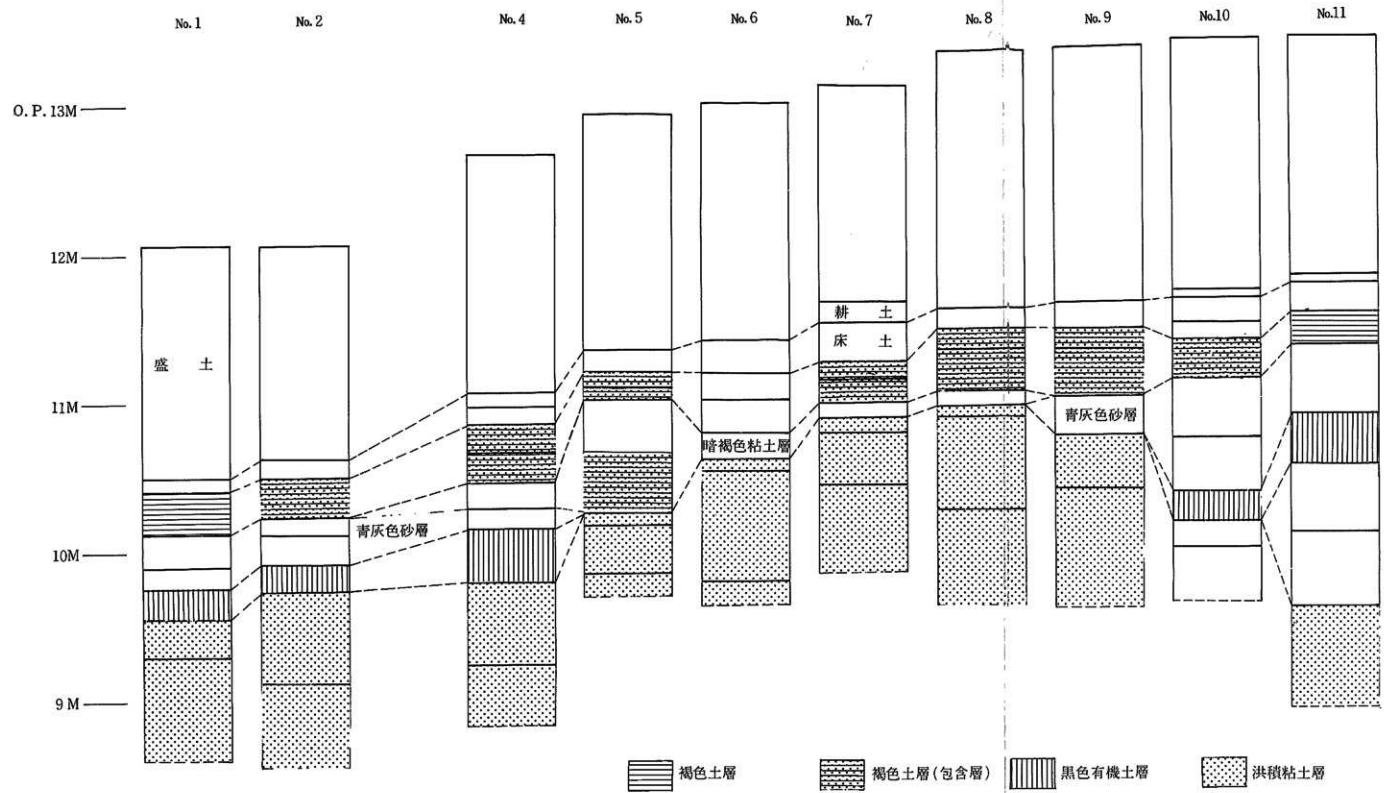
第1次掘削において、No.2テストピットとNo.10テストピットの間、約400mにわたって平安時代の瓦器、奈良時代、古墳時代の須恵器、土師器を包含する土層が検出された。包含層は道路面下、1.8m（op. 11m）附近に位置し、旧耕土下約50cmで埋没深度は浅くNo.4、5、6、7、8の洪積粘土が盛り上がり、微高地を呈する部分では、粘土層の上に褐色土が堆積し、この褐色土は包含層と黄褐色土の無遺物層に分かれる。上記のテストピットから北及び南に行くにつれ、包含層が灰紫色砂層に変わり、黄褐色土層がなく砂層となる。よって微高地を中心に黄褐色土に遺構面が存在し、No.2、9、10の遺物は流出したものと考えられる。遺構としてはNo.4で黒色有機土の包含層がテストピットの東部分に属し、黄褐色土層を切り込んだ状態が認められた。しかし全体としては遺物が磨滅した小片がほとんどで、床土と思われる層にもいく分含まれるところから、遺構面は後世整地による攪乱を受けた可能性がある。

第2次掘削では全テストピットで遺物、遺構は認められなかった。なおNo.3はNo.2、No.4で先に遺物の存在が判明していたので掘削を中止した。

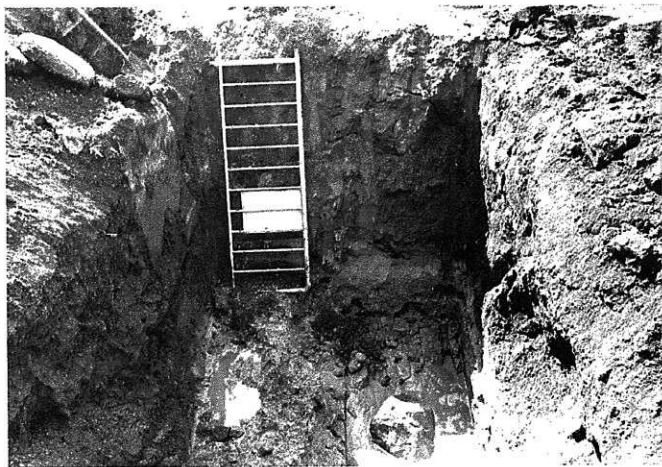




褐色土层
 黑色有机质土层
 黑色有机质土层(包含层)
 洪积粘土层



図版五 三十一工区第四トレンチ、三十二工区第四トレンチ断面





大阪文化財センター調査報告Ⅶ

泉南郡熊取町埋蔵文化財分布調査報告書

—伊藤忠商事、日鐵不動産K.K.開発予定に伴う—

昭和49年5月

財団法人 大阪文化財センター

は し が き

財団法人 大阪文化財センター
理事長 加藤 三之雄

全国各地の国土開発は、自然環境や歴史的風土の破壊をもたらしてきました。しかしながら、この様な傾向への反省はとみに高まり、埋蔵文化財保護への関心は深まっています。開発と保存の調和をはかる文化財の今日の問題の解決は非常に困難なことでありますが、すぐれた文化的環境は、祖先の残した歴史的遺産を継承、発展させんとする我々の努力によって創出されるものでありましょう。計画的な開発とともに文化財が府民の生活に生かされる手だての確立は急務であります。

今回、当大阪文化財センターが、伊藤忠商事株式会社、日鐵不動産株式会社の委託を受けて、泉南郡熊取町開発予定地内の遺跡分布調査を行ったのは、該当地域の埋蔵文化財の実態を把握し、基礎資料を整える事を目的としたものであり、調査担当者の作製した報告が遺跡保存の基礎資料としての任を果せば幸いです。調査の実施にあたり多大な援助を下された伊藤忠株式会社、日鐵不動産株式会社及び戸田建設株式会社の関係者各位に感謝の意を表します。

昭和49年 5月

例 言

- (1) 本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、伊藤忠株式会社、日鐵不動産株式会社の委託を受けて実施した大阪府泉南郡熊取町所在、伊藤忠株式会社、日鐵不動産株式会社開発計画地内の埋蔵文化財分布調査報告書である。
- (2) 調査に要した費用はすべて伊藤忠株式会社、日鐵不動産株式会社の負担による。
- (3) 調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室長 中西靖人、同調査員 辻内義浩、妹尾直子が担当し、昭和49年4月8日から、同年4月13日まで実施した。
- (4) 調査に当っては、赤木克視、安井幸雄、木村宏、山崎博、国乗和雄の諸氏参加を得た。又大阪府教委の石神 怡氏には多大な援助を受けた。記して謝意を表す。
- (5) 本報告書の執筆は、中西靖人が監修し、辻内義浩が執筆した。

目 次

は し が き

例 言

I 調査に至る経過 1

II 調査の結果 1

図 版

第1地点採集遺物

遺跡分布図

調査地域図

〔Ⅰ〕調査に至る経過

伊藤忠商事株式会社と日鐵不動産株式会社が宅地開発を計画した泉南郡熊取町五門他の地域は、住宅地域として、最近脚光をあびているところであるが、古代からの文化財が多く残っているところとしても有名であり、また組織的な分布調査が実施されたこともなく、遺跡、遺物等埋蔵文化財が新たに発見される可能性が極めて濃厚な地域でもある。

この点に関して工事着工以前に計画地内の埋蔵文化財分布調査を実施する必要が認められることを大阪府教育委員会より指導を受けた上述の2者は、戸田建設株式会社大阪支店を通じて調査の依頼を(財)大阪文化財センターに提出し、協議の上、昭和49年3月28日付で受託契約をした。

現地に於ける調査は(財)大阪文化財センター業務課調査室が実施し、昭和49年4月8日に着手し、同4月13日に終了した。

〔Ⅱ〕調査の結果

従来熊取町に於ける埋蔵文化財は、成合の成合寺より石器の剝片が、野田の東円寺跡では平安時代の瓦が出土することが知られている。又中世の遺跡としては小谷の城ノ下遺跡、高蔵寺城跡、成合の雨山城跡等が知られている。(「熊取町の文化財」昭和48年11月による)しかしまだまだ遺跡の存在が予想される地域で、緻密な分布調査がのぞまれていた。

今回調査の対象地域は阪和線熊取駅より東へおよそ2km、大阪府泉南郡熊取町大字野田、五門、小垣内、大久保にあたる地域である。大阪湾にそそぐ佐野川の上流和田川が泉山地の谷間より平野部へ流入する附近、台地状の平端地と小高い丘陵が該当地域である。調査地域のほぼ中央に梅谷池があり、この池より東が丘陵地で、西北が平地である。丘陵は北から南へ下る小さな尾根が2つ並びこの谷間を堰止めて梅谷池が作られている。

第1地点

和田川の東岸、川の縁辺にそって水田が広がっている。西から東に向って徐

々に高まり、調査地域中央の丘陵に及んでいる。この水田の南端部で東一西に細長くブルドーザーが耕土を除去した跡があり、床土が露頭している。この西寄りの部分で古墳時代須恵器や時期不明の土師器の小片を採集した。遺物散布の範囲は水田に雑草が繁り確定し得なかったが、古墳時代の集落跡が存在する可能性が強い。

第2地点

調査地域のほぼ中央部に南から北へ下る舌状丘陵がある。現在は梅谷池の築造や、開墾のため独立丘陵状を呈しているが、もとは背後の和泉山地に連なっていたであろう。この丘陵は「オオツカ」と地元民が呼称していると南川幸司氏より教示があった。確かにこの丘頂部（標高65m）は円墳らしく小高い形状を呈している。しかし石室石あるいは土器等は認められず、古墳と確定し得ない。したがって確認調査を要する古墳参考地とした。

第3地点

第2地点と同じ舌状丘陵を北へ下っていくと、その突端部（標高54m）がやはり古墳のマウンド様の形状を呈している。しかし第2地点同様、古墳と確定し得る資料がなく、古墳参考地とした。

第4地点

梅谷池北方の丘陵の西斜面に窪みがあり、そこで一石五輪塔が2基認められた。一基は紀年銘はなく戒名が刻印されていた。他の一基は完全に埋まり空輪だけが地表に頭を出している。和泉砂岩で造られ少し磨滅しているが整った形で比較的古く、江戸初期以前のものであろう。

ちょうど丘陵の東斜面には現在の墓地がある。この墓地には上記の一石五輪よりやや小型で粗雑な江戸時代の紀年銘をもつ一石五輪塔があり、塔婆群中には更に古いものが多くあると思われる。第4地点と共に調査が望まれる。尚熊取町では大久保の中世墓地で天正十二年銘のある五輪塔、大久保の正福寺山で建武四丁己十一月銘の石像が知られている。

第5地点

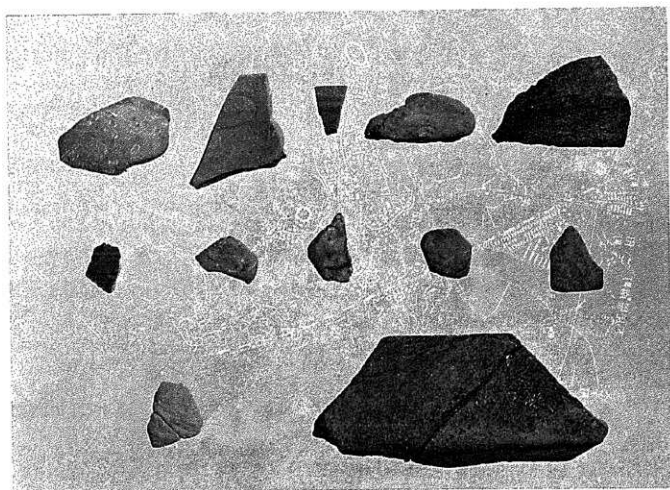
梅谷池から北方に続く水田の中を通る道路の横に土砂が捨てられていた。この土砂の中に時期不明の弥生式土器が一片混入していた。この土砂の原位置は判明しなかったが、土砂の色、質からみて、この近辺から掘削されたものとし

て大過ないと思われる。

以上の分布調査の所見から以下の点が今後の課題としてあげられる。

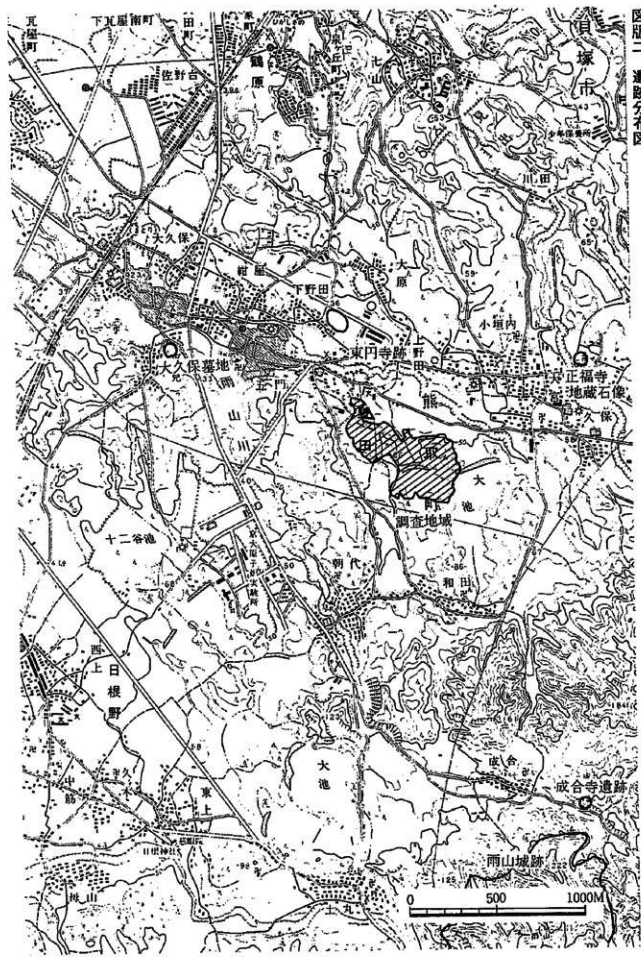
第1・4 地点地点は明らかに遺跡であるから遺物散布地の範囲の確定、遺物層の有無、遺構の有無の確認が必要である。

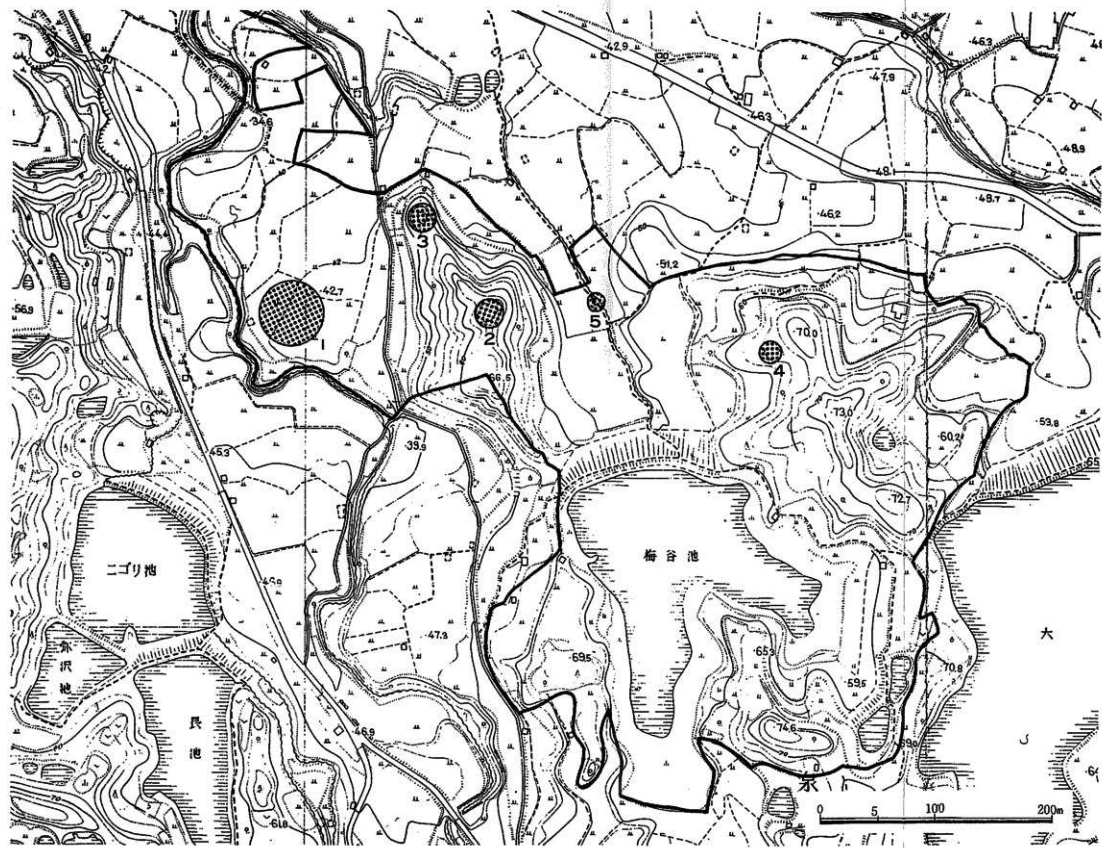
第2・3・5 地点は遺跡か否かの確認が必要である。



図版1 第1地点採集遺物

図版二 遺跡分布図





大

大阪文化財センター調査報告Ⅸ

近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内
瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査
中間報告書

昭和49年7月31日

財団法人 大阪文化財センター

は し が き

財団法人 大阪文化財センター
理事長 加藤三之雄

河内平野は、氾濫と開拓を繰り返しながら今日の姿を形成してきました。

しかしながら近世以前の開拓、開発行為は、現在の様な一部特定の人々の為になされたのではなく、そこに住む全すべての人々の為に彼ら全体の想意と工夫の上に立って行なわれたものであります。したがって彼らの生活をおびやかすものは、現在の様な人工的な公害ではなく、自然そのものだったのです。そこには、自然との果てることのない闘いがあった反面、自然との完全な形での調和も存在したのです。

さらに、一方では自然は彼らを苦しめた反面、古代より現在にいたるまで、彼らの生活のありさまを克明に大地に刻みつけて残してくれたのです。

したがって、我々が今、この河内平野を利用しようとする時は、ただ単に目先の経済性や、土木技術におぼれることなく上述の人々の努力を十分に理解し、彼らの残した遺産の上に、より発展的な形で開発行為を行なわなければなりません。この様な形の開発計画が立案されない時は、必ずや地域住民に、その昔自然が与えた苦痛よりもさらに強い苦痛を与える結果を生み出すことでしょう。

現在実施している瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査も、当該遺跡の実態を正確に把握し、基礎資料を整備することを目的としたものであります。調査を実施するに当たり、多大の援助を下さっている日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所の関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、晴雨を問わず現場での調査業務に従事している調査関係者諸氏に深く感謝する次第です。

昭和49年7月

例 言

- 1) 本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施している瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査の中間報告である。
- 2) 調査に要する経費はすべて日本道路公団大阪建設局が負担している。
- 3) 調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し、昭和49年5月1日から着手し、7月31日現在11ヶ所の調査が完了し、残り10ヶ所について継続して調査している。
- 4) 現地調査は、調査室長中西靖人の指示の下、調査主任辻内義浩が担当し、赤木克視(明治大学OB) 国乗和雄(近畿大学OB) 安井幸雄(近畿大学学生)の諸氏を調査員として、また山崎 博(立命館大学学生) 木村宏史(大谷大学学生) 松本 実、橘 正美(京都産業大学学生)の諸君を調査補助員として起用し、積極的な協力を得ている。

一方、出土遺物の整理作業は、調査主任妹尾直子を担当者として、整理調査補助員、若林愛子(華頂短期大学学生)、作業員中西 露の協力の下、現地調査と平行して実施している。
- 5) 本冊子の執筆は、中西靖人(I、II)、辻内義浩(III)が当たった。
- 6) 調査に際しては、前田建設工業株式会社、押井工務店、香川建設、宮崎重機の各社の積極的な協力を得ている。

目 次

はしがき

例 言

I 調査に至る経過	1
II 調査の進捗状況	2
III 調査結果の概略	2

挿 図 目 的

- 第1図 弥生式土器(第II様式) 11層出土
- 第2図 弥生式土器(第I様式) 14層出土
- 第3図 弥生式土器(第I様式) 15~16層出土

表

遺跡概要一覧表	8
---------	---

図 版

1. 遺跡の位置とトレンチの位置
2. 遺跡の時期的範囲と埋没深度

〔I〕調査に至る経過

日本道路公団大阪建設局が建設を進めている近畿高速自動車道天理～吹田線予定路線内に含まれる遺跡は実に11ヶ所に及ぶ。

これら11ヶ所の遺跡の内、昭和48年度に、財団法人大阪文化財センターは、日本道路公団大阪支社の委託事業として亀井遺跡、久宝寺遺跡、友井東遺跡の3遺跡の第1次発掘調査を実施し、これら各遺跡の範囲、埋没深度、遺構の有無、遺物の量、時代の認知等について明らかにした。(大阪文化財センター調査報告Ⅳ、近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書)

また、大阪市東住吉区長吉長原町、同城山町で実施されている高速電気軌道第2号線建設工事に関して、当センターが実施した試掘調査で、いままで知られていなかった長原遺跡(古墳時代～平安時代)、城山遺跡(弥生時代後期)の2遺跡を発見し、その範囲、埋没深度等を明らかにした(大阪文化財センター調査報告Ⅵ中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告)この両遺跡も近畿自動車道内に含まれるものである。

このようにして、昭和48年度に於いて予定路線の南半部の遺跡の実態がほぼ明らかとなった。

この結果に基づいて日本道路公団は、大阪府教育委員に対して、この南半部の本格調査の実施を依頼したのである。しかしながら、大阪府教育委員会は、調査体制を確立する上に於いて、全体の予定が立たず、経費も算出出来ない現状では調査を実施するのは無理だとして、さらに北半部に含まれる6遺跡の実態の確認が必要であることを主張した。

一方、日本道路公団も、昭和49年度に北半部の調査を実施することは予定していたことであった。

こうして、日本道路公団大阪建設局は、財団法人大阪文化財センターに対して、瓜生堂遺跡他5遺跡の第1次発掘調査を依頼し、昭和49年5月1日付で両者は受委託の契約を締結し、実際の事業に着手したのである。

〔Ⅱ〕調査の進捗状況

昭和49年5月1日から着手した当該調査は、昭和49年7月30日現在、山賀遺跡(No.1～No.5)、若江北遺跡(No.6～No.7)、巨摩麿寺跡(No.8～No.9)、瓜生堂遺跡(No.10～No.11)の11ヶ所が完了し、西岩田、新家両遺跡の調査を継続して実施している段階である。

今回の調査は、現地に於ける実際の掘削作業を5月17日から実施し、南から順次北へ調査を進めている。

現在のところ調査のピッチは順調であるが、48年度と比較して、中央分離帯の状況が劣悪であり、調査には困難を極める状態である。

今後の調査対象地としての西岩田遺跡、新家遺跡についても、中央分離帯一面に沼地が存在している部分もあり、若干遅れる可能性もある。

〔Ⅲ〕調査結果の概略

1) 山賀遺跡

すべてのトレンチで遺物が検出された。遺物包含層は同一地点で埋没深度を異にして、重り合っている場合が多い。大別すると、表土下1m以内に古墳時代以降の遺物、表土下2～3m前後に弥生時代中期の遺物、表土下3m以下に弥生時代前期の遺物に区分される。第3トレンチ



第1図 弥生式土器(Ⅱ様式)11層出土



第2図 弥生式土器(Ⅰ様式)14層出土



第3図 弥生式土器(Ⅰ様式)15～16層出土

では、地表下50cmから4mまではほぼ包含層が連続して存し、しかも遺構も伴う場合が多く注目されるが、特に注目すべきは第1様式-第1、2様式-第2様式-第3、4様式と連続し、層序に乱れが少ないことは、弥生式土器、及び弥生時代の変遷の解明に大きな力となるであろう。

〈No.1トレンチ〉

○G. L. -0.45m~-0.90m—T. P. 4.06m~3.49m

須恵器、瓦器、土師器などの平安-鎌倉時代の遺物包含層が約45cmの厚さで堆積している。遺物は細片が多く一次堆積かどうか疑がわしい。遺構の存否も不明である。

〈No.2トレンチ〉

○G. L. -0.45m~-0.65m—T. P. 4.06m~3.96m

No.1とほとんど同じ状態の包含層が認められる。

○G. L. 4.00m~4.40m—T. P. 0.86m~0.36m

薄黒色砂質土中より弥生時代前期の土器（第2様式）を数片採集した。磨滅の著しく、他所からの流入と考えられる。

〈No.3トレンチ〉

○G. L. -0.50m~-0.90m—T. P. 3.65m~3.25m

No.1、No.2から連続する包含層である。

○G. L. -1.25m~-1.40m—T. P. 2.90m~2.75m

弥生時代中期の土器（第3、4様式）を包含する黒色細砂層が堆積し、この下層の黄灰色砂層中に、直径40cmのピット、巾1.2mの土拵他、溝状の落ち込みが検出されるなど、遺構の遺存が良い。

○G. L. -1.55m~-2.35m—T. P. 2.60m~1.80m

上記の包含層とほとんど接続して弥生時代中期（第2様式）の包含層が続いている。この包含層下の黒色半粘半砂質土を切り込んだ、長さ1m30cm、巾80cmの土拵が検出された。この土拵中には壺と伴に大小2つの甕が重ね合せた状態でおさまっていた。

○G. L. -2.35m~-2.80m—T. P. 1.80m~1.35m

上記の遺構面となった黒色半粘半砂質土が弥生時代前期(第1、2様式)の包含層である。土器の量はあまり多くないが50cmの厚さを呈す。遺構は灰黒色砂層を切り込んだ溝が東西方向に2状検出された。

○ G. L. -2.80m~-4.00m——T. P. 1.35m~0.15m

上記の遺構面となった灰黒色砂層と更に下に続く灰白色砂層、黒色砂層、灰黒色砂層、黒色粘土層の5層に及んで弥生時代前期(第1様式)が包含層である。包含層は1.2mもあり、土器の量も多く遺存の良好な完形品も多い。第1様式の内最も古いタイプの土器も存する。遺構の存否については不明である。

(No.4 トレンチ)

○ G. L. 0m~-0.40m——T. P. 4.47m~4.07m

No.1~No.3までと同様、奈良~鎌倉期にかけての須恵器、土師器、瓦器等を出す土層だが、遺構は不明である。

○ G. L. -2.0m~-2.60m——T. P. 2.75m~2.15m

植物遺体や流木の多い灰黒色粘土層中より弥生式土器(第3、4様式)が数片採集された。遺構の存否は不明である。

○ G. L. -2.90m~-3.55m——T. P. 1.85m~1.20m

巾1.8m、深さ75cmの大きな溝が東西に走っている。この溝の埋土中や、掘削面上から弥生時代前期の土器(第1様式)が出土する。

(No.5 トレンチ)

○ G. L. -0.20m~-0.60m——T. P. 3.53m~3.13m

表土直下から瓦器や土師器の小片が包含されている。包含層下にあたる茶褐色粘質土を切り込んでピットや不整形な落ち込みを検出したが、遺構の性格は判然としない。時期は平安~鎌倉期に該当する。

○ G. L. -1.85m~-2.30m——T. P. 1.88m~1.43m

45cmの厚さを呈す黒色半粘半砂土中に弥生時代中期の土器(第3、4様式)が包含されている。この下層暗青灰色微砂層を切り込んで小さな溝や不整形な落ち込みが検出された。

○ G. L. -3.4m~-3.7m——T. P. 0.33m~0.03m

黒色粘土層中で弥生時代中期の土器（第3、4様式）を採集したが、遺構の存否は不明である。

2) 若江北遺跡

すべてのトレンチで遺物が検出された。表土下1m以内では山賀遺跡と同様、平安～鎌倉時代の遺物包含層がひろがっている。弥生時代中期は地表下1.5m～3mの間にみられ、弥生前期の遺物はNo.6、7ともみられないが、弥生後期、古墳時代前期の遺構がNo.7の地表下1m強にみられるのが注目される。

〈No.6 トレンチ〉

○G. L. -0.10m～-0.50m——T. P. 2.59m～2.09m

表土直下の灰褐色粘質土より少量の土師器、瓦器などが採集された。山賀遺跡より続いてひろがる平安～鎌倉時代の包含層であるが遺構の存否は判然としない。

○G. L. - 2.8m～- 3.4m——T. P. -0.01m～-0.61m

青灰色粗砂層と黒色粘土層中より弥生時代中期の土器（第3、4様式）が採集された。遺構は伴わないと考えられる。

〈No.7 トレンチ〉

○G. L. -0.15m～- 0.6m——T. P. 2.80m～2.35m

表土直下に第1トレンチとまったく同じ状態の包含層が認められた。

○G. L. - 1.1m～- 1.3m——T. P. 1.85m～1.65m

厚さ約10cmの黒色微砂層中に弥生時代後期の土器（第5様式）と古墳時代前期の土師器（古式土師）が包含されている。包含層の下層、淡褐色細砂層中に柱穴が3つ検出されたが建造物を復元し得るには至らない。

○G. L. - 1.5m～-1.65m——T. P. 1.45m～1.30m

黒色泥砂層中に弥生時代中期の土器（第3、4様式）が包含され、その下層の青灰色微砂層中には、幾条もの小溝がめぐらされ、柱穴には木根が40cmほど残っており、高床住居（倉庫）であるが、建造物の全貌はつかめない。

○G. L. - 3.6m～- 3.8m——T. P. -0.64m～-0.84m

茶黒色粘土中に巾5cm、長さ30cmの形状を示す黒色粘土の落ち込みがあり、杭と考えられる。一定の方向で幾本もあり、黒色粘土の上面には黒色微砂がたまっているものもあるところから土止めの杭が相定され、水田に関連する施設と考えられる。土器は伴出しませんが弥生時代前期であろう。

3) 巨摩麿寺跡

全てのトレンチで遺物が検出された。巨摩麿寺の建築遺構は確認し得なかったが、地表下50cm前後の包含層中の平安～鎌倉時代の豊富な遺物は、寺跡の存在を予想させるのに十分である。更に地表下2m～4mにかけての弥生時代遺跡も確認され瓜生堂、若江北遺跡との関連をつかめる。

(No.8 トレンチ)

○ G. L. - 0.4m ~ - 0.8m — T. P. 2.40m ~ 2.00m

瓦、瓦器、須恵器など平安時代～鎌倉時代にかけての遺物包含層が約40cm堆積している。この内上層20cmは後世に水田のため整地を受け、括攪状態を示す。遺構の存否は不明である。巨摩麿寺に関するものであろう。

○ G. L. - 0.9m ~ - 1.30m — T. P. 1.90m ~ 1.50m

古墳時代の土師器、須恵器や瓦の存す包含層が褐色砂層の上に約40cm堆積している。褐色砂層中には土墳状の盛り上がりがあり、奈良時代の建築遺構の可能性がある。

○ G. L. - 2.00m ~ - 2.40m — T. P. 0.80m ~ 0.40m

青灰色粗砂層中より弥生式土器(第3～4様式)を数片採集した。周辺の遺構から流出してきたものであろう。

(No.9 トレンチ)

○ G. L. 0.0m ~ - 0.75m — T. P. 2.91m ~ 2.16m

瓦、須恵器など平安～鎌倉時代の遺物を包含するが、遺構は攪乱され判然としない。

○ G. L. - 2.40m ~ - 3.40m — T. P. 0.51m ~ - 0.48m

黄灰色砂層と暗青褐色粘土層中に弥生時代後期の土器(第5様式)を包含し、

黄灰色砂層は北側の溝に落ち込んでいる。

○G. L. -3.05m~-3.70m—T. P. -0.13 ~-0.88m

上記の層と連続した包含層であり、かつ同じ弥生後期の土器を出土するがいく分か古い生活面と考えられる。

○G. L. -3.70m~-4.10m—T. P. -0.78m~-1.18m

暗灰褐色粗砂層中に弥生時代中期の土器（第3様式）を包含している。他所からの流入で遺構は存しないと考えられる。

4) 瓜生堂遺跡

以前の調査時の所見どおり弥生中期の土器が地表下2m50~3mの前後で大量に出土した。地表下2m前後に位置する弥生時代後期の包含層はNo.11とNo.10の間を北限であることが再確認された。

(No.10トレンチ)

○G. L. -0.10m~-0.90m—T. P. 3.15m~2.35m

表土直下から遺物が検出されるが、地表下70cm~90cmの部分に集中しており、上部は括弧されていると思われる。遺構は無遺物層である黄褐色土に達する遺構がないので形状は判然としないが、包含層中に遺構が存する。これは奈良時代から鎌倉時代までの重なり合った遺跡のうち比較的新しい時代に属するものであろう。

○G. L. -1.80m~-2.55m—T. P. 1.45m~0.70m

灰白色粗砂中に磨滅の著しい弥生式土器（第V様式）が採集された。包含層は約75cmと厚いが、土器の量は多くなく、又第2次堆積のものであり、遺構は伴わない。○

○G. L. -2.65m~-3.20m—T. P. 0.60m~0.05m

遺物を包含する黒色土は約55cmの厚さで、3つの層に分かれる。それぞれに遺構が伴うが、暗青灰色微砂の地山を切り込んだ遺構以外はその形状が判然としない。検出された遺構は巾70cm、深さ60cmの溝の他に小さな溝が様々に切り合い重なっている。出土土器はいずれも弥生時代中期（第3、4様式）のもの

である。

(No.11トレンチ)

○ G. L. -0.15m~-0.90m—T. P. 2.91m~2.16m

瓦器、須恵器、土師器の包含層である。暗黄褐色砂質土中には不整形な落ち込みがあるが、時期や用途は不明である。

○ G. L. -2.70m~-3.60m—T. P. 0.36m~0.53m

黒色砂土と青黒砂土層中に弥生時代中期の土器（第3、4様式）が検出された。遺構は青灰色粘土層を掘り込み作られているが、この地山面は西から東へとやや急に低まり、西側の微高い所にピットや溝が掘削されている。

山賀遺跡

トレンチ番号	埋没深度(G. L.)	埋没深度(T. P.)	遺物・遺構	時代
No. 1	-0.45~-0.90	3.94~ 3.49	瓦器、土師器	平安~鎌倉
No. 2	-0.45~-0.65	4.06~ 3.96	瓦器、土師器	平安~鎌倉
	-4.00~-4.50	0.86~ 0.36	弥生式土器(第1様式)	弥生前期
No. 3	-0.50~-0.90	3.65~ 3.25	瓦器	平安~鎌倉
	-1.25~-1.40	2.90~ 2.75	弥生式土器(第3,4様式) 溝、土埴、柱穴	弥生中期
	-1.55~-2.35	2.60~ 1.80	弥生式土器(第2様式) 土埴	弥生中期
	-2.35~-2.80	1.80~ 1.35	弥生式土器(第1,2様式) 溝状遺構	弥生前期
No. 4	-2.80~-4.00	1.35~ 1.51	弥生式土器(第1様式) 木器	弥生前期
	-0.00~-0.40	4.47~ 4.07	瓦器	平安~鎌倉
	-2.00~-2.60	2.75~ 2.15	弥生式土器(第3,4様式)	弥生中期
No. 5	-2.90~-3.55	1.85~ 1.20	弥生式土器(第1様式) 溝状遺構	弥生前期
	-0.20~-0.60	3.53~ 3.13	瓦器 溝状遺構、柱穴	平安~鎌倉
No. 5	-1.85~-2.30	1.88~ 1.43	弥生式土器(第3,4様式) 溝状遺構	弥生中期
	-3.40~-3.70	3.37~ 3.70	弥生式土器(第3,4様式)	弥生中期

若江北遺跡

トレンチ番号	埋没深度(G. L.)	埋没深度(T. P.)	遺物・遺構	時代
No.6	-0.10~-0.50	2.59~ 2.09	瓦器	平安~鎌倉
	-2.80~-3.40	-0.01~-0.61	弥生式土器(第3,4様式)	弥生中期
No.7	-0.15~-0.60	2.80~ 2.35	瓦器、黒色土器	平安~鎌倉
	-1.10~-1.30	1.85~ 1.65	弥生式土器(第5様式) 古式土師器、柱穴	弥生後期 古墳前期
	-1.50~-1.65	1.45~ 1.30	弥生式土器(第3,4様式) 柱穴(柱根残存)、溝状遺構	弥生後期 古墳前期
	-3.60~-3.80	-0.64~-0.84	枕跡	弥生前期

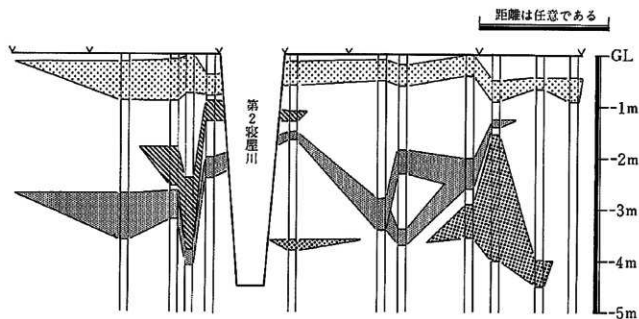
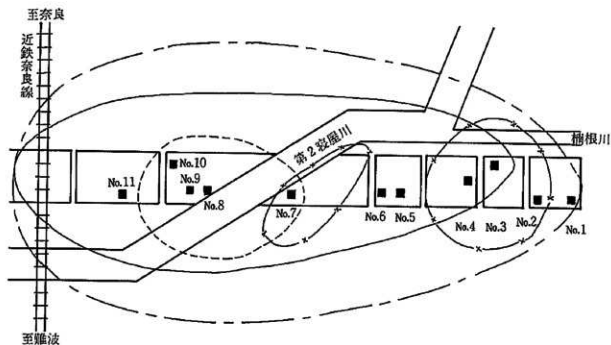
巨摩鹿寺遺跡

トレンチ番号	埋没深度(G. L.)	埋没深度(T. P.)	遺物・遺構	時代
No.8	-0.40~-0.80	2.40~ 2.00	瓦、瓦器、須恵器	平安~鎌倉
	-0.80~-1.30	1.90~ 1.50	土師器、土壇	奈良~平安
	-2.00~-2.40	0.80~ 0.40	弥生式土器(第3,4様式)	弥生中期
No.9	0.00~-0.75	2.91~ 2.16	瓦器、須恵器、土師器	平安~鎌倉
	-2.40~-3.40	0.51~-0.48	弥生式土器(第5様式)	弥生後期
	-3.05~-3.80	-0.13~-0.88	弥生式土器(第5様式)	弥生後期
	-3.70~-4.10	-0.78~-1.18	弥生式土器(第3様式) 石鏡、木器	弥生中期

瓜生堂遺跡

トレンチ番号	埋没深度(G. L.)	埋没深度(T. P.)	遺物・遺構	時代
No.10	-0.10~-0.90	3.15~ 2.35	土師器、須恵器、瓦器、土拵	古墳~平安
	-1.80~-2.55	1.45~ 0.70	弥生式土器(第5様式)	弥生後期
	-2.65~-3.20	0.60~ 0.05	弥生式土器(第3,4様式) 溝	弥生中期
No.11	-0.15~-0.90	2.91~ 2.16	土師器、須恵器、瓦器、土拵	古墳~平安
	-2.70~-3.60	0.36~-0.53	弥生式土器(第3,4様式) 柱穴、木器	弥生中期

単位はm



距離は任意である

- | | | | |
|-----------|-------------------|---------------------|------------------|
| — · — · — | 古墳時代～歴史時代遺構範囲 | [Dotted pattern] | 古墳時代～歴史時代包含層 |
| - - - - - | 弥生時代後期(V様式)遺構範囲 | [Diagonal hatching] | 弥生時代後期(V様式)包含層 |
| — — — — — | 弥生時代中期(Ⅲ～Ⅳ様式)遺構範囲 | [Cross-hatching] | 弥生時代中期(Ⅲ～Ⅳ様式)包含層 |
| — x — x — | 弥生時代前期(I～Ⅱ様式)遺構範囲 | [Grid pattern] | 弥生時代前期(I～Ⅱ様式)包含層 |

図版二 遺跡の时期的範圍と埋没深度

